厚木市史たより 第15号

平成28年7月1日

題字は渡辺崋山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

古代の愛甲に関する二、三の憶説

厚木市史編集委員会委員　鈴木靖民

はじめに

『厚木市史』古代通史編の編集、執筆のため、これまで厚木市域の遺跡を歩き、墨書土器や瓦を調べ、調査担当者などを招いて部会を開いてきた。しかし厚木市域のほとんどを占める相模国愛甲郡について記した文献はない。わずかに『倭名類聚抄』という平安時代初めの辞書には愛甲郡の六つの郷名が記されるが、それも以前の郷がどうだったか明らかでない。

1　戸田小柳遺跡は郡の津か

地域社会の実態は、まず行政、文化の拠点や交通の要所を知ることが手がかりになる。愛甲郡などを管轄する国司がいる相模国府は、奈良時代には平塚市の四之宮付近にあったことが長年の発掘調査によって明らかにされた。大住郡の郡家（役所）も国府域にあるとみられている。

これに対して、愛甲郡（または評の時期）の有力首長が郡司（評造）になって支配拠点とする郡家は、七世紀末を中心とし、八、九世紀に及ぶ愛甲西の御屋敷添遺跡の大型建物群などが有力とされている。だが、東名高速道路の工事に伴う発掘調査は部分的であり、全貌はわからない。郡家が郡域のどこに位置するかは重要だが、同地点は推定される愛甲郡域のはずれに偏っており、大住郡との堺にごく近くなる。ほかに遺跡もなく、郡山、氷といった明確な遺称地名もない。御屋敷添遺跡を重視すると、評の時は大住、愛甲が分かれていなかったかとも想像される。では郡司クラスの有力首長がいた集落、郡の重要な施設はあるだろうか。

昨年（二〇一五年）秋、私が勤める横浜市歴史博物館で、かながわ考古学財団の神奈川県内各地の調査成果を示す出土品が展観された。そこで私は厚木の戸田小柳遺跡（厚木市No.137遺跡）（図1）の奈良・平安時代の墨書土器や陶器に注目し、これを使った人びとの集落の性格に思いをはせた。この遺跡は古墳時代の「位至三公」と陽刻された鏡片が発見されて話題を呼んだところであった（この種の鏡は北部九州や近畿で集中して出土するとされ、相模での初めての発見は文化や情報の伝播のルートや意義などを考える上で重要である）。

図1　厚木市戸田小柳遺跡　位置図

そこで今年一月末、二〇一二年以来調査を担当する戸羽康一氏に部会での報告をお願いした。厚木市の南端の相川中学校の南、戸沢橋のすぐ北にある新東名高速道路建設予定地の発掘現場でも説明して頂いた。調査地点は相模川の右岸、玉川が流入するすぐ右側の微高地の二ヵ所に分布している。集落の全体像は不明だが、弥生時代後期から古墳時代、奈良・平安時代、さらに中世、近世と続く複合遺跡であり、近代は相川村役場も置かれていた。

古墳時代後期から平安時代にかけての流路で出土した遺物は、鏡のほかに土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、硯、瓦、管状土錘、砥石、刀子（茎）、北宋銭、木製品（桶か）などがある（『戸田小柳遺跡』かながわ考古学財団、二〇一六年）。

私が関心を持つ文字史料は、灰釉陶器皿片の底部に二字分の墨書があり、編集協力者の永井肇氏は丈□と読んで丈部ではないかと憶測したが、墨痕が鮮明でない。丈部は愛甲郡にはいないが、足上郡、余綾郡の郡司クラスの氏の名である（協力者の田尾誠敏氏は東海産の陶器かとした）。土師器坏片にも判読不能の墨書がある。

また陶製の風字硯片の底部に春の字の五画までを書いたような焼く前の刻書がある（図2）。春は平塚市構之内遺跡の土器に例がある。これらは北東北（青森・岩手・秋田各県）、北海道出土の土器に書かれる例の多い奉の字の略体かとみられる（蝦夷の夷の略とする見解があり、私も初めは賛成していた）。奉は

図2　戸田小柳遺跡出土風字硯刻書
（公財）かながわ考古学財団提供）

平川南氏が日本列島規模で考えた通り、タテマツルという意味であり、神や仏、祖先などへの祈願の際の供献具、祭具としての土器に文字を省画して書くことがある（拙著『日本古代の周縁史』岩波書店、二〇一四年）。この奉の略体説に対して、最近、三上喜孝氏は九九七年、遼の僧行均の編んだ『龍龕手鑑』にみえるので、仏典の文字とみなして北東北、北海道に広まった可能性を述べた（「文字がつなぐ古代東アジアの宗教と呪術」『古代東アジアと文字文化』同成社、二〇一六年）。留意すべき指摘だが、北東北に特徴的な仏教信仰が何かを推定し、この文字との関係を解明しなければならない。平安時代、九世紀以降の北東北の陸奥側では関東、南東北と共通する、例えば薬師如来のような仏像、密教、修験道の仏具の分布が示す信仰のほかに、最近、一〇世紀後半、一一世紀前半の阿弥陀信仰の浸透を意味する鏡像も北三陸の久慈市で出土した。この種の文字と仏教を結ぶ資料はまだ認められない。

小柳遺跡の硯の文字を奉の字を書こうとしたと解するのも一つの仮説であり、断定できない。

ところが、戸沢橋のほぼ東、約二キロにある海老名市本郷遺跡の平安時代の墨書土器に、「生」の字と「万」の字の第一画以下を上下に組み合わせて書く文字が四例ある（富士ゼロックス他『海老名本郷』Ⅱ、一九八八年・同XⅢ-1・同XV、一九九八年）（図3）。近くの本郷中谷津遺跡にも一例ある（『海老名市史』1資料編 原始・古代、一九九八年）。この種の文字には氏や集団の名の一部と考えられる文字がある（高島英之「日本古代村落出土墨書・刻書土器の基本的性格をめぐって」『日本古代考古学論集』同成社、二〇一六年）。特に「生」の一画目を短くして二画目に続け、五画を「万」の一画目に重ねる例は「奉」の略体に少し似ている。「生」の一字の墨書土器が共伴する遺構は多くあり、上が「生」ならば生部の略で、壬生部が正しい表記だが、生壬部、壬部、壬生にも作ることが知られている。とすると、同遺跡の属する高座郡、隣の大住郡の郡司に壬生直氏がいることを思えば、両郡に隣り合う愛甲郡にも同氏の居住や交流があったとするのが自然だろう（大住、愛甲の地域的共通性も考慮される）。この憶説が成り立てば、硯の刻書は「生」「万」の合字を書こうとしたともみられる。これも仮説だが、字形が類似しても、北東北などの奉の字とは違った意味になる。

それにもまして、この地に硯があり、実際墨書土器などがあることは、何かを記録したり、計算したりする人たちが存在した事実を示唆する。奈良・平安時代の刀子もあるが、木簡の書記に関係あるかどうかわからない。北宋銭は一〇一七年初鋳の天禧通宝であり、何かの実用を思わせる。さらに緑釉陶器は、平塚市の相模川右岸、やや引っ込んだ地点の林B遺跡で、九世紀後半頃に平安京産の緑釉陶器の大量出土したことが想起される。林B遺跡は津で、国司やその子弟が国府に持ち込んだとみられている。戸田小柳遺跡は現在の相模川河口まで12キロほどある。

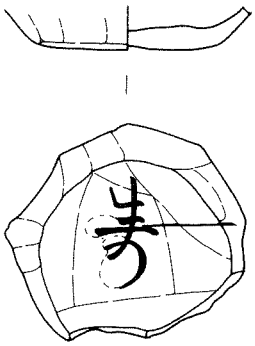

図3　海老名市本郷遺跡出土墨書土器
（『海老名本郷』Ⅱ、一九八八年）

田尾氏は、ここに奈良・平安時代の集落の津があって、旧玉川を利用する愛甲郡の中心地と目される愛甲、温水あたりとの水上交通の相模川、すなわち古代の鮎河の出入り口となる船着き場ではないかという仮説を述べた。河川の引っ込みの運河として、栃木県さくら市の森後遺跡の川津の例をあげた。今の相模川に注ぐ玉川は近代、戦前から戦後の付け替えであるという。近世の絵図では相模川が激しく蛇行し、戸田には左岸に行く舟渡しがあり、川を下れば古代の国府のあった四之宮に着く。愛甲からは恩曽川を下り大用水を経て東西に走る大山道（矢倉沢往還道）を過ぎ戸田に着き、そこから相模川へ漕ぎ出すコースか、または玉川から途中で渋田川、花水川を通ってから海を東行し、相模川河口にという推測もできる。大用水はもともと小流路だったかもしれない。

この遺跡の集落の建物や規模などは不明だが、確かに立地は相模川に接し、川などを利用して北上するなら愛甲の中心地域に着く。つまり物資と人の交通の要所である。出土遺物は少ないが、物資の搬入、搬出に伴う書記と結びつけることはできる。わずかだが、ほとんど京や国府でしか出土しない緑釉陶器の発見も無視しがたい。もし船着き場なら管理、保管のための建物があったかもしれない。福島県いわき市の荒田目条里遺跡出土の木簡によれば、磐城郡司の雑任（下役）に郡家の津を管理する津長がいた。資料が不十分だけれども、戸田小柳遺跡も愛甲郡家に属する津の候補としてよいだろう。今も付近の発掘調査が続いているので、その成果に期待したい。

2　秋村は愛名のことか、信仰は郡域を越えるか

茅ケ崎市本村の居村B遺跡では、これまで文字を書き付けた木簡の類が六点出土している。二〇一二年に平安時代の水田の畦畔跡で発見された「貞観□年八月十□日」とある折敷（角盆）の部材を転用したような板に、勾村と秋村の何々殿と称される地域の有力者に多量の酒を支給し、飯・雑菜も与えたことを記す（図4）。対象者の総数は九〇人以上で、酒の量をみると有力者に分配されたのち、行事に従事する住民に二升ほど配られたと推定されている。この行事とは、一九八八年、同地で発見された放生を催した時の木簡と考え合せて、放生という魚や貝を放す仏会とみられ、それに伴う宴会の折の酒飯の提供を暗示する。その主催者、施主は同地の様子から高座郡の郡司クラスと考えられ、その下役のほか、各地の有力者につき従った住民も対象とされたと推測できる。しかも放生木簡は従来、天平頃かとされたが、これも貞観だろうという解釈もある。

二〇一三年一月末、相模の古代に詳しい荒井秀規氏が報告して下さった。荒井氏は木簡の勾村は現在も茅ケ崎市と寒川町の境界を流れる小出川の大曲という地名によって高座郡の村とみられるが、秋村は隣の愛甲郡の英那郷、『万葉集』（巻一四-三四一三）の「足柄の安岐奈の山に」というのに当たるとする説を披露した。『倭名類聚抄』の愛甲郡六郷の一つ英那をアキナと読むことは古く村岡良弼が『日本地理志料』で上の安岐奈を引いて述べ、当時の愛名村、今の厚木市の愛名・長谷・温水・緑ケ丘・飯山・上古沢・下古沢の地域とした。では、高座郡と愛甲郡は隣り合うが、高座郡での同郡司が行う仏教行事に愛甲郡愛名の人たちが有力者に率いられて参加することがありえただろうか。

その前に秋村が愛名郷に該当するのか。これについては荒井氏が相模国関連の古代地名を博捜した結果、両者の発音の類似を指摘するもので、最も蓋然性がある。七一三年の一字地名（国名など）を二字の嘉字に改めよという詔に従って、それまでの秋の一字を愛名と変えたのだろう。車を群馬にした例がよく知られる。クルマを音便でグンマとしたごとく、アキをイ音便でアイと読み、ナを付けてアイナに変えたと想定できる。

古代の「村」の性格については議論があるが、律令制にのっとった郡―郷（里）―小里の行政秩序とは別に、地域社会の伝統、慣行の実態があり、村は日常的な一字表記も行なわれていたと解釈できる。有力者と住民の関係のうち、支配―被支配の面よりも、最近、田中禎昭氏が説くような、地域住民相互の集団的関係（『日本古代の年齢集団と地域社会』吉川弘文館、二〇一五年）が脈々と続いていたことの表われとみたい。

愛甲郡では愛名の高松山の麓の谷戸に愛名宮地遺跡があり、古代寺院が存在した。遺跡では基壇をもつ仏堂跡が検出され、奈良時代末から平安時代中頃にかけての「寺」の字の墨書土器、大量の灯明皿、仏鉢形の須恵器の土器、黒色土器、瓦塔が出土して、僧侶や住民が集まって盛んに仏事を催し、参加していた様子がうかがわれる。上記の下古沢、温水などに信者たちの村々があったと確認されている。ほかに下荻野の中三嶽遺跡、次に述べる鐘ケ嶽寺院跡があり、清川村馬場No3遺跡も知られる。隣の大住郡の真田・北金目遺跡（平塚市）には、仏堂は未発見だが、銅鋺、須恵器盤、瓦塔、白毫のある人面（仏）の墨書土器がある。相模川を挟んだ愛甲郡の対岸の高座郡には相模国分寺、国分尼寺（海老名市）が建っている。これら以外に仏鉢形の須恵器が何ヵ所かで出土している。永井肇氏はこれら各種の寺院を結ぶ仏教信仰のネットワークが、霊山大山を中心にしてあったと論じている（「厚木市史たより」第13号）。

さらに大山の東、七沢の鐘ヶ嶽の中腹で平安時代の瓦、鉄釘などが表面採集で見つかっており、二〇一五年一月末・二月初めの市教育委員会の予備調査でも瓦片、土師器片、鉄滓を採集した。表採の六葉単弁蓮華文軒丸瓦は、冨永樹之、岡本孝之の各氏、編集協力者の高橋香氏によれば、八王子市の南多摩窯跡産で、小田原市の千代廃寺、御殿山窯址群などの瓦と同笵であるとして、西相模における寺院相互のネットワークがあったとされている。最近、高橋氏は素縁素弁六葉蓮華文軒丸瓦も南多摩窯産で、武蔵国分寺講堂出土瓦と同じとした。こうして大山信仰のネットワークと寺院用の瓦の生産、流通、供給先をめぐる寺院間のネットワークとが唱えられている。果たして双方のネットがどう絡むのか。国をまたぐ生産、流通の構造も今後追究すべきことだろう。

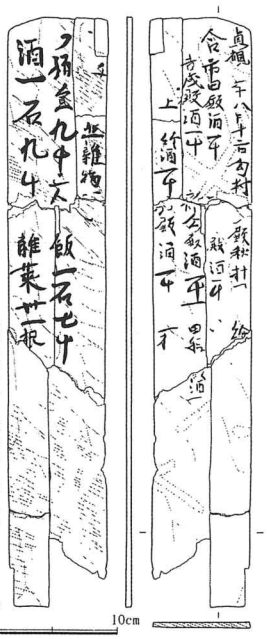

図4　茅ケ崎市居村B遺跡出土木簡

長さ四五八×幅七八×厚さ五ミリメートル

（拙著『相模の古代史』高志書院、二〇一四年）

そこで、初めに記した居村B木簡の秋村の有力者やその配下の人たちが高座郡にかかわる仏事に参加したのではという想定に立ち返って、憶測してみる。

結論を先にいえば、高座での仏会には人びとが戸籍のうえで属する郡のいかんにかかわりなく集まり、愛甲の人たちも参加していた、それは仏教信仰での紐帯に基づくのだろう。そして、その逆のケースが愛名の寺院の催しその他でもみられないだろうか。

島根県出雲市の青木遺跡は出雲郡の郡家に関連する遺跡とされるが、祭祀に関係する遺構や神像のような遺物も多い。この遺跡の出土木簡、墨書土器には同郡の八郷のうち、美談と伊努の二郷の名を書くものが多数あり、それはこの地域の社なり、祭祀、信仰施設なりに二郷の住民が集う事実を反映している。つまり信仰し会合に参加する人びとは、律令制が定めた郷（里）ごとの編成に捉われることがないのである。仏教信仰の場に関しても、上総、下総をはじめとする千葉県など関東には古代の村落内寺院という小規模な仏堂が多数分布する。神奈川県内にも何ヵ所かあり、厚木市の寺院跡もそれに該当する例がある。この場合でも推定される郡域と対応関係はほとんどなく、郡堺に存在することもある。これも郡を越えて仏に祈る人たち共通の信仰圏が形成されているからに違いない。

鐘ヶ嶽の山頂には浅間神社が祀られている。参道の脇に一丁目から二十八丁目までの江戸時代の石製の道標が立っているのは永井氏がふれた通りである。その寄進者をみると、大住、高座に並んで、八王子、すなわち多摩の信者グループが目に付く。山頂から四方をみると、はるか北のほうに八王子の町を望むことができた。八王子道を往還する参拝者の姿がイメージできる。古代にも多摩の人たちが鐘ヶ嶽に参集したかもしれない。宗教などの信仰は政治的、行政的な規制、管理とは別の結びつきを促し進めることをあらためて認識できる。なお仏教信仰には地域の住民、僧侶の関与以外に、都から最新の教義を携えて地方を遊動する僧侶たちもいた。東大寺の諷誦文稿などはそのための平易な自習書であった。

3　中国由来の則天文字を銅印、土器に記した人たち

愛甲郡域にも多少の文字史料がある。なかでも銅印や墨書土器には、六九〇年、周（唐）の則天武后の時にできた則天文字が使われており、注目される。それは七〇四年に帰国した遣唐使が日本に伝えたとされ、その後、関東へも中国起源の文字文化が伝わって浸透した事実を物語る。飯山の湯気沢出土の銅製の印の「主・永・久・王」の字を組み合わせて一字としたような「鑿」は「證」に当たる。印は仏教に関係するというが、用途はよくわからない。下依知の大久根遺跡出土の平安時代の墨書土器の十四点に書かれた「宋」は、山木を合わせたごとくみえ、これまで宋と読まれているが、多分、則天文字の山水土を一字に圧縮した「埜」の変形したもので、「地」の字である。また口に山を合わせたような字は、則天文字の「岳」で「正」の字のことである。それらは大部分の墨書土器と同様に一字だけの表記がほとんどである。この限りでは呪術的、象徴的な文字、符号の感を受ける。

本来周では普通の文章に使われたが、日本に入って最新の文字として多様な使い方がされたのだろう。相模国分尼寺出土の墨書土器には則天文字の「天」「君」「初」の字に似た風構えふうの字形の墨書土器片が多数ある。これらは則天文字をヒントに一種の吉祥や呪術的符号として考案され（平川南『墨書土器の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年）、寺の法会などで用いたのでないか。古代の関東では移住した渡来人が先進文化、技術を手に入れたので（佐藤信「古代の地方豪族と渡来人」『日本古代の王権と東アジア』吉川弘文館、二〇一二年）、則天文字の普及には彼らの介在が考えられる。前記の都から各地の寺院を廻る僧や尼による伝播もあったと思われる。さらに地方社会では書記などに中国の漢字や文章を利用する必要があったのは郡司などだろう。

相模の場合、上にもふれた大住、高座両郡の郡司である壬生直氏の関与が想像される。壬生氏は愛甲郡にも移動や移住の容易な人たちである。倭王権の時期に壬生直氏が管理、統率した渡来人集団の壬生吉士は高座郡にいないが、飛鳥部吉士が住んだことは居村B遺跡の放生木簡から判明する。関東に移住した吉士氏はもともと六世紀頃、各地の屯倉の経営に関連した集団だと思われる。こうしてわずか一字の文字史料にも、色々な歴史が秘められることが知られよう。

厚木市史たより　第15号
平成28年7月1日発行
編　集　厚木市教育委員会文化財保護課
発　行　厚木市
住　所　神奈川県厚木市中町三-一七-一七
電　話　〇四六-二二五-二〇六〇
ＦＡＸ　〇四六-二二三-〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。